

「救う会」新体制で継続

支援をうける被害者ら

「思い途切れさせない」

北朝鮮による日本人拉致問題に解決の糸口が見えない中、被害者やその家族を支援している「救う会・群馬 群馬ボランティアの会」が、県民の関心を高めようと懸命に活動している。発足から15年目となる今年、メンバーの高齢化を理由にいったんは解散が決まったが、役員の大半を入れ替えて新体制で活動を継続することになった。

会は、代表の大野トシ江さん(83) 前橋市三俣町 Ⅱ が、拉致された横田めぐみさんの母、早紀江さんと親交があることが縁で2000

2年12月に発足した。夫の敏雄さん(80)が事務局長となり、県内で講演や署名活動が続けてきた。署名は累計約7万3千人分、家族会



会の活動を振り返る大野さん夫妻

などに送る募金は約1900万円集めた。

ここ数年、中心メンバーが亡くなったり、高齢が理由の退会が相次いだ。会には現在約260人が登録しているが、実動部隊は10人前後。大野さん夫妻も持病が悪化するなどして、7月末に活動をこれ以上続けられないと判断し、早紀江さんに報告した。敏雄さんは「苦渋の思いだった」と振り返る。

しかし数日後、状況を知った数人の会員が「活動を受け継ぎたい」と運営を担うことを買って出た。大野さん夫妻にとって思わぬ申し出だったという。8月10日、50、60代が中心の新役員8人が決まった。

夫妻は今後も従来通りの役割にとどまるが、運営の一線からは退く。新役員1人、小島健二さん(69) Ⅱ 伊勢崎市八寸町 Ⅱ は昨年11月に開かれた講演会で同会を知り、活動に加わった。

「多くの人に拉致を知ってもらったため、活動を途切れさせないことが大切だ」と力を込める。

トシ江さんは周囲の支

えで会が存続することに感謝し、「帰国するめぐみちゃんを、早紀江さんと一緒に迎えたい」と話している。

新体制となって最初の署名と募金活動を10月1、2の両日、前橋市亀里町のJAビルで開かれる「収穫感謝祭」で行う。